

## 第4章 旭川アイヌの教育と職業階層

野崎 剛毅

札幌国際大学短期大学部准教授

### 第1節 課題の設定と対象者の概要

#### 第1項 課題の設定

本章では、アイヌの人々の教育と職業について検討していく。アイヌ民族の教育と職業階層については、これまでにも各地域で分析をおこない、いくつもの知見を得ている（野崎 2018a, 2018b）。

職業については、地域ごとに異なる形をとる「アイヌ労働市場」（小内 2016: 260）の存在が指摘された。アイヌ労働市場とは、その地域のアイヌの人々が比較的多くつく「アイヌ特有の職業」を中心に形成されている。アイヌ特有の職業には、アイヌ舞踊や土産物屋などのように「アイヌであること」をいかした職業と、民族的なものではないがその地域でアイヌの人々が多く集まる職業とが存在する。とくに後者の職業群はアイヌの人々に職を提供する一方で、地域の中でも賃金が低くまた危険であるといった特徴をもっており、アイヌの人々の経済的地位の低さをうむ要因であると考えられる。

教育については、2008年の北大調査（野崎 2010）およびその後行われた札幌、むかわ、新ひだか、伊達、白糠、帶広での聞き取り調査によって、アイヌの人々の教育水準の低さや中退率の高さ、教育達成が収入へと結びつかず到達階層をあげる効果をもっていないことなどが指摘されている。若い世代では高校進学率こそ全入に近い形で和人のそれに追いついているものの、高等教育進学率は半分にとどまっている。

進学率を低迷させる原因として、貧困や差別、教育を忌避する文化などが存在することも判明している（野崎 2018a）。学校を舞台に、若い世代でも報告されるアイヌの人々への差別、いじめは、子ども間だけでなく、時に教師からという形もとっている。加えて、アイヌ労働市場の存在がアイヌの人々の進学意欲を抑制している可能性も指摘された。アイヌ特有の職業はその特質上、就くために高い教育を必要としない場合が多い。このことが、「進学をしなくとも就職はできる」という意識をうみ、教育からドロップアウトすることの心理的障壁を下げている可能性がある。これら、差別やアイヌ労働市場の存在がアイヌの人々の「学校嫌い」という土壌をうみだし、教育達成の低迷につながっていると考えられるのである。

教育が到達階層をあげる効果を持たない一方で、かわって影響力をもっていたものが離婚経験や転職経験であった。とくに男性については、高い収入を得ている者の多くは離婚経験がなく、転職経験も少なかった（野崎 2018a: 101-2）。

ただし、教育達成のあり方もアイヌ労働市場のあり方も、地域ごとに異なる様相を呈している。そこで本章では、旭川市においてアイヌの人々がどのような教育へのアプローチをし、どのような職業階層形成をしているのかを明らかにする。

## 第2項 対象者の概要

本章で分析の対象とするのは、アイヌ調査対象者14人のうち、アイヌの家庭で育った11人である。和人配偶者である3人を分析から外したのは、教育や就職というライフイベントがおおむね結婚の前、すなわち、彼ら/彼女らが「アイヌ民族の一員となる」以前に起こるからである。なお、対象となる11人はいずれもアイヌ家庭で育っただけでなくアイヌの血を引いている。

対象者の属性はきわめて特徴的である。男性が4人、女性が7人と女性が多く、また、世代別にみると30代が1人、40代が1人、50代が2人、60代が5人、70代、90代がそれぞれ1人ずつである。過去に分析で使用してきた世代区分でいえば、青年層が1人、壮年層が3人、残る7人は老年層となる。さらに大きな特徴は、1人を除く10人までもが旭川市近文周辺というほぼ同じ地域で生まれ育っているという点である。このうち9人は同じ小学校、中学校出身者であり、残る1人も調査内で小学校名、中学校名を明らかにしていないものの、おそらく中学校は同じである。

## 第2節 出身階層と北海道観光ブーム

出身階層として、ここでは15歳時点での暮らしぶりと、親の職業を確認する。

### 第1項 北海道観光ブームと老年層の出身階層

1950年代、北海道に観光ブームが訪れた。昭和初期から熊彫りが盛んに行われていた旭川市でも、熊彫りをはじめとするアイヌ土産への需要が高まっていた。本対象者の多くが育った近文地区はアイヌの人々の割合が高く、熊彫りも盛んであったことから、とくに老年層の多くはこの観光ブームを直接的に経験している。

対象者が子どもの頃の両親、あるいは片親の職業が明らかになっているのは11人中10人である。そのうち6人は、親の片方あるいは両方が熊彫りや刺繡などのアイヌ工芸に携わっていた。対象者の口からは、北海道観光ブームの際、いかに土産品が多く売れたかという話がいきいきと語られている。また、その影響から子ども時代に土産物屋で時にアイヌ舞踊などを観光客に見せた経験をもっているものもいる。

「民芸店。その頃すごく儲かってた。バスが止まってお客様がバーッと来て。私も小学校の頃はそこへ行って踊り踊ってお客様に見せたり、なんだかんだやって。お金もらってはいいないけども、多分親達は少しばらしてたのかな。」（老年層）

「小学校の頃、親に一緒に連れられて阿寒湖。土産品売り場の店頭でいたから、その時よそのおばあちゃんだけど、刺繡をしているところをずっと見ていて、小学校1、2年生。そこでまねごとみたいにさせてもらったりとか。」（老年層）

「木彫りをしてたからね、うちの親父の親が層雲峠で観光土産の店開いてたの。だから夏場はね、景気がいいんですよ、ね。だから、まあまあ暮らしてたんだよね。それで、冬場は今度自分たちが作るでしょ。作ったものをあれするから、だから作るまではちょっとお金が無いって時はちょっと寂しい思いするけど、出来て売ると、ちょっとね、贅沢するとかね、なる

んだよね」（老年層）

「昔すごく大きくお店をやっていたので、観光バスも何十台と来て、というか来るぐらい、そういう時代に母がお店を出していたので（略）飛ぶように何でも売れた時代で、私もお店に出ていた時代もありましたし。まあ当然踊りもやりましたし。」（壮年層）

1950年代頃の近文地区では、「アイヌであること」を活かしているという意味でのアイヌ労働市場が十分に機能していたといえる。

ただし、他の地域同様、近文においてもアイヌ労働市場は不安定さを抱えていた。ブーム中からすでに、観光客で賑わうのは夏期間に限られていた。そのため、夏の間はよくても、冬になると土産物は売れなかった。

また北海道観光ブームの終焉は、近文の人々にとって一般に語られるよりも早くやってきたようである。1960年代に入ると徐々に土産品は売れなくなっていく。

（（60年代はじめの15歳の頃は）観光客も減ってきて木彫りの熊も売れない時代だったんですね）「うん」（そんなに売れなかつたんですね）「まあ、一時はよかったんだろうけど。もう」（老年層）

昭和20年代に生まれた6人のうち3人は、15歳ころ、すなわち1960年代前半、昭和30年代後半の時点には、すでに生活が苦しかったと回想している。

## 第2項 壮年層、青年層の出身階層

青年層、壮年層の子ども時代になると、木彫りを中心とするアイヌ労働市場としての観光業の影響は小さくなっている。

親がアイヌに関わる職業に就いていたのは2人で、いずれも母親に限られる。父親は全員がアイヌと直接かかわらない仕事をしていた。15歳時点での暮らしぶりは全員「普通」である。とくに2人は父親が公務員系の職業であり、生活は安定していたようである。また壮年層の1人は15歳時の暮らしぶりを「普通」と言つてはいるものの、塾やそろばん、ピアノなどの習い事を経験しており、これまでのアイヌ調査で聞かれた同世代に比べると余裕のある生活を送っていたようである。

表4-1 出身階層

世代	性別	父職業	母職業	15歳暮らしどり
青年層	男性ー1人	非アイヌ系ー1人	不明ー1人	普通ー1人
壮年層	男性ー1人	非アイヌ系ー2人	木彫りー1人	普通ー3人
	女性ー2人	不明ー1人	土産物屋ー1人 不明ー1人	
老年層	男性ー2人	木彫りー5人	木彫りー2人 (内職で木彫りー1人) 刺繡ー1人 農家ー1人 その他ー1人 不明ー2人	普通ー2人 貧しかったー4人 不明ー1人
	女性ー5人	農家・漁師ー2人		

### 第3節 教育達成と到達階層

#### 第1項 教育達成

最終学歴は、短大中退が1人、高校が2人、中学校（高等小学校を含む）が8人である。短大中退者は中退後に事務系の専門学校へ通っている。また、中学校卒のうち、3人は職業訓練校へ1年通っている。

進学状況と、教育に対する視線には世代によって違いがはっきりと出ている。青年層、壮年層の4人に関しては、3人が高校まで進学し、1人はさらに短大まで進学している。それに対し、老年層の7人はいずれも中学校まで高校進学者はおらず、中学卒業後に洋裁学校、職業訓練校に通った者がそれぞれ1人いるだけである。

対象者に、さらに進学をしたかったかどうかをきくと、青年層、壮年層の4人はいずれもこれ以上の進学は考えなかったと回答している。勉強が嫌いなので進学しなかったものの、「ほんっと、勉強しておくべきだったっていうのは後悔しています」と笑いながらではあるが語った者がいただけである。

一方で老年層はさらなる進学を考えていなかったという者は2人だけである。その2人はそれぞれ中学校、高等小学校まで通い、それ以上の進学は考えていなかった。理由として、1人ははやく働き始めたこと、そもそも父親が中学校を卒業したら自衛隊に入つてほしいと望んでいたため、自身も進学するという意識 자체をあまりもっていなかつたことをあげている。もう1人は、もともと身体が弱く、尋常小学校からまともには通えなかつたため学校嫌いになつており、学校を避けるようになつていたと述べている。

この2人に對し、残りの5人は進学を「諦めた」という。理由は「経済的理由」が多い。美容師になりたかつたためそのための学校へ進学したが父親から「そんな仕事はダメだ」と反対され、断念した者もいた。

表4-2 教育達成

世代	最終学歴	さらなる進学
青・壮年層	中学校→職業訓練校—1人 高校—2人 短大中退—1人	考えなかった—4人
老年層	中学校（高等小学校）—5人 中学校→職業訓練校—2人	諦めた—5人 (美容系学校—1人、高校—4人) 考えなかった—2人

注：個人の特定を避けるため、青年層と壮年層は同一カテゴリーとした。

## 第2項 青年層・壮年層の職業階層と年収

対象者の到達階層として、職業と年収を確認すると、表4-3、表4-4のようになる。

青年層、壮年層の大きな特徴として、その収入の高さが指摘できる。対象者のうちの2人は、それぞれ個人年収で600～700万円、500～600万円、世帯年収で1000～1500万円、900～1000万円となっている。これは過去の調査対象者と比較してもきわめて高く、とくに非農林水産業従事者としては特筆すべき額である。両者に共通するのは、ひとつの企業に長く勤め続けていることである。1人は、高校時代の部活の縁で就職し、以来10年以上、同じ会社で働いて販売職から管理職へとステップアップしている。もう1人は高校を経て市の臨時職員となり、その後転職してからは40年近く同じ職場で働いている。バブル崩壊後、日本の経営が崩壊するなかで年功制賃金体系も揺らいできているとは指摘されるところであるが、同じ企業に長く勤め続けることで賃金がある程度あがっていくこと自体は珍しいことではない。したがって、この2人の状況は、決して特殊なものではない。だが、この2人がこれまでの調査で最も高い水準の収入を得ているという事実は、ホワイトカラー職に就き、その仕事を継続すること自体がアイヌの人々にとっていかに難しいことであったかを逆に示唆しているといえる。

なお、残りの2人もアイヌ調査のなかでは極端に低い収入ではない。個人年収不明となっている1人は、これまでに職場を3回かわっているが、仕事内容自体は建築系で一貫して変わっておらず、これもまたキャリアを継続することの重要性を示している。個人年収が100～200万円である者に関しては、4回転職しているもののそのうち3回はリストラによる失職である。本人は「中途半端なところに勤めるからそういうことになる」と言っているが、本人の問題というよりは時代的な問題による不運といえるだろう。いずれにしても、青年層、壮年層の4人は、アイヌとまったく関わらない職業でそれにキャリアを伸ばしている点で、これまで調査してきた地域とは異なっているといえる。

## 第3項 老年層の職業階層と年収

一方で、老年層のキャリア形成は苦難を感じさせるものとなっている。対象者はいずれも65歳以上であり、一般的には退職していてもおかしくない年齢である。しかし、対象者のなかで事实上リタイアしているのは2人だけであり、そのうちの1人は病気療養による退職である。

個人の収入は1000万円以上と際立って高い者がいるが、これは家賃収入があるためであるようだ。さらに、その家の建替をした影響で年収は高いものの「今が一番苦しい」状況であるという。

それ以外には、個人年収で100～200万円という者が4人、100万円未満が2人である。世帯年収で見ても、500万円前後が2人いるものの、残りはおおむね100万円から300万円くらいである。過去の調査では、老年層の平均年収は男性で個人223.5万円、世帯298.4万円、女性で個人64.3万円、世帯237.1万円であった（野崎 2018a: 86）。母数の人数や年齢に違いがあるため単純な比較はできないものの、とくに女性では決して低い数字ではない。ただし、この数字が老年層になつても働くざるを得ない結果によるものだとすれば、手放しで評価できるものではない。

職歴をみると、最終学歴を終えてからすぐに就職したのは2人だけであり、4人は、家業や親戚がやっていた民芸品店の手伝いをすることが初職であった。残る1人はウェイトレスやバーテンダーなどの仕事を短期間に転々とし、結婚、妊娠を機に内職として刺繡をするようになった。

現在は4人が、アイヌ関連の仕事についている。このうちの1人は内職としてはじめて以来、続けている刺繡を活かして刺繡教室の講師をしたり頼まれた着物を作ったりしている。その他の3人はアイヌ関連の施設維持・管理に関わる仕事をしており、文化伝承などに直接関わるものではない。

キャリア全体を通してみると、老年層の多くが何らかの形でアイヌに関わる職業を経験している。1人は、本人はアイヌ関連の仕事には関わっていないが、夫が熊彫りをしていたため夫が作った商品を店まで運ぶ手伝いをしていた。一度もアイヌに関わる職業を経験していないのは1人だけであった。

表4－3 職業

世代	初職	現職	転職回数
青・壮年層	販売職—2人	管理職—1人	0回—1人
	事務職—1人	事務職—1人	1回—1人
	建設職—1人	建設職—1人	3回—1人
		清掃職—1人	4回—1人
老年層	販売職—4人	サービス職—2人	カウント不能—4人
	専門職—1人	専門職—1人	3回—2人
	サービス職—1人	清掃職—1人	2回—1人
	運輸職—1人	建設職—1人	
		無職—2人	

注：個人の特定を避けるため、青年層と壮年層は同一カテゴリーとした。

表4-4 年収

世代	個人年収	世帯年収
青・壮年層	100～200万円—1人	100～200万円—1人
	500～600万円—1人	400～500万円—1人
	600～700万円—1人	900～1000万円—1人
	不明—1人	1000～1500万円—1人
老年層	～100万円—2人	～100万円—1人
	100～200万円—3人	100～200万円—2人
	200～300万円—1人	200～300万円—1人
	1000～1500万円—1人	500～600万円—2人
		不明—1人

注：個人の特定を避けるため、青年層と壮年層は同一カテゴリーとした。

#### 第4節 階層形成

##### 第1項 差別経験

対象者のほとんどが旭川でもアイヌの人々が多く通う同じ小学校、中学校に通っていたためか、本調査でも差別に関する話は多く聞かれた。

「小学校でアイヌの勉強を始めた頃、クラスの女の子に否定的なニュアンスで『アイヌの子っこ』と言われた。」（壮年層）

「『あ、犬いた』みたいな感じとか。追いかけられて、雪のなかに頭つっこまれたりとか、あとは、足ひっかけられてころぼされたりとか。そのお返しはしているけどね。」（老年層）

「結構、泣いちゃった子もいっぱい、いる。学校でいじめられてね。学校終わって帰ってくれば、そりや地元にはね、いっぱいいるからさ、あれだけど。学校内で、やっぱり、そういう何か言われて、泣いてたね。」（老年層）

差別、いじめの内容は様々である。自分自身は受けていないものの、同級生がいじめをうけているという話も多かった。また、過去の調査でも見られたように、教師から差別を受けたという証言もあった。あるクラスではアイヌの女の子が女性教員から「臭い」といわれ、髪を引っ張られていたことがあったという。また、

「給食費や修学旅行の積立金の集金日にお金を持っていかないと先生に『じゃあ立っていなさい』と言われ、1年生から6年生まで春夏秋冬立たされていた。男の先生のほうが意地悪で差別した。『立て』と言われるのがわかっているので言われる前に自分から廊下へ出て

といった。」（老年層）

といった話をする者もある。

ただし、これまでの事例と異なり、旭川調査ではこれらの差別経験が学校嫌いへとは直接結びついていない。上述のいつも廊下に立たされていた者は、それが嫌で小学校にはほとんど行かなくなってしまったという。しかし、中学校にあがると「向こうの方は都会、都会って…ちょっと街の方から来るから、みんな仲良くしてくれて、もう学校行くのが楽しみで。友だちいっぱいいたし、卒業する時には。スポーツできたから割と人気者で」と一転して述べている。本調査の対象者は自分自身が強烈な差別やいじめに直面した者が少なく、また、やられたらやり返せる、あるいは他のいじめられている子から頼られる者が多かったことが、その背景にはあるのかもしれない。

## 第2項 転職と離婚

これまでのアイヌ調査と、旭川調査の大きな違いとして、転職や離婚といった経験をもつものが比較的少ないという点があげられる。

アイヌの人々にとっても転職が貧困リスクとなることは、過去の調査からも明らかになっている（野崎 2014, 2018a, 2018b）。そのようななかで表4-3でもみたように、本対象者は一部を除き、3回程度までの転職である者が多い。とくに男性においては一度も転職していない者が1人、3回が2人となっており、本人も数えられないほどの転職をしたという者は老年層の1人だけである。

女性についても、3人は若いころや離婚後などに転職を繰り返しているものの、それ以外の4人はそれぞれ転職が1～4回と、ひとつの仕事に比較的長く従事している。また女性に関しては、これまでの調査で女性に特有のアイヌ労働市場のひとつとされていた水商売に就いた経験をもつ者がいないといった特徴をもつ。

離婚についても特徴がある。品川（2018: 61）によると、アイヌの人々の離婚率は男性で15.7%、女性で39.4%である。今回の対象者では女性3人が離婚を経験している。女性7人に対し3人であるため、さほど小さな割合ではない。だが、親の世代まで見てみると、子どもの頃に親が離婚していたという者は1人しかいない。帯広調査では、22人の対象者のうち、実に16人は子どもの頃に片親、あるいは両親との離別や死別を経験している（野崎 2018b: 26）。これらと比較すると、本調査の対象者は定位家族においても生殖家族においても、離婚をあまり経験していないといえる。

転職や離婚といったライフイベントを経験している者が少ないとということは、到達階層の高低や収入の多寡とは関係ない部分での生活の安定を示しているといえる。

## 第3項 アイヌ労働市場

老年層の対象者にとって、アイヌ民芸品店や木彫り、刺繍などのアイヌ関連産業は、きわめて身近なものであった。父母の多くが木彫りを生業にしていたほか、民芸品店を開いていた者もあり、また知床や阿寒、層雲峡、洞爺湖などで親戚が開いている店の手伝いをしていた者もいる。

そこで働くことが、本格的な就職をするまでの手軽なアルバイト先となっていた。

また、対象者が結婚、出産、育児をするなかでも、大きな負担にならない仕事として民芸品店の手伝いをしたり、木彫りや刺繡を内職としておこなったりするケースも見られた。かつて、アイヌの若い世代にとってアイヌ労働市場はセーフティネット的な役割を果たしていたといえる。

しかし、これらは2つの危うさも秘めていた<sup>1)</sup>。1つは、民芸品店のいくつかは季節的なものであったことだ。ブーム時の北海道観光は夏場がその中心であった。たとえば阿寒や層雲峠、洞爺湖などの土産物屋でアルバイトをしていた者によると、これらの土産物屋はいずれも冬場は観光客が来なくなるため店を閉めていたという。これはアイヌの人々に収入の不安定化をもたらしていた。

2つめは、観光ブームが去った後である。1960年代後半ころから北海道観光ブームは落ち着きを見せ始め、多くの店が閉店していった。対象者の親や親戚が開いていた店もブームの後や、1980年代以降には高齢化などにともなって徐々になくなっていた。

青年層、壮年層でアイヌに関わる観光関連の仕事に関わった経験をもつ者がいないことからもわかるように、かつてセーフティネットとしても機能していた観光業としてのアイヌ労働市場は、一部の博物館などを除いてほぼ姿を消しているといえる。

一方で、近年はアイヌ協議会やアイヌ協会関連の仕事が、アイヌの人々に働く場を提供している。関連施設の管理や清掃などがそれである。また、アイヌ舞踊をしたり刺繡の講師などをして副収入を得る者もいる。かつての木彫りや土産物屋から、無形のものへとアイヌ文化伝承の中心が移ってきてている。しかし、これらの仕事、とくに関連施設の管理、清掃等については、その職に就ける者の人数がきわめて限られており、また若者世代が関わる部分が小さいという点で、かつてのセーフティネット的な役割をもっていたアイヌ労働市場とは一線を画している。

## 第5節 まとめ

本章では、対象者の教育と階層に焦点を当て、その特質をさぐってきた。

旭川調査の特徴は、周囲にアイヌ工芸をはじめとするアイヌの人々の文化的な活動を生業にしてきた者が多かったことである。とくに老年層の対象者のほとんどは、親が木彫りや刺繡を職業としていたか、あるいは内職としてこのような活動をしていた。北海道観光ブームでアイヌが脚光を浴びた時代において、それを享受できた世代であるといえる。老年層対象者の親世代は、観光アイヌとしてのアイヌ労働市場を形成していた。ただ、近文のアイヌ労働市場も、他地域の労働市場と同様に不安定さというリスクを抱えていた。そもそも夏場を中心とした季節労働的な側面があり、またブームに支えられていただけに、ブームが去った後は貧しくなる者が多かった。

だが、観光ブームに翻弄された親世代を経て、対象者たちの世代になると、観光業としてのアイヌ労働市場はほぼその姿を消す。対象者たちのキャリアは、そのスタートこそ親世代が経営する店の手伝いなどであったものの、それ以降はほとんどアイヌとは無関係の仕事で占められている。北海道第2の大都市という特質からか、他地域に見られたアイヌの人々が集まる職場というものもほとんど存在せず、それぞれに他地域と比較して安定したキャリアを残している。

この傾向は、さらにその次の世代においてより顕著なものとなる。青年層、壮年層世代においては、ある程度の学歴に支えられ、他地域では見られなかったような安定的なキャリアと収入を得る対象者が多かった。

しかし、このことは旭川のアイヌの人々が、アイヌであることを完全に捨て去ったのだということを意味しているのではない。青年層、壮年層も含め、対象者の多くは現在でもアイヌ舞踊や刺繡といったアイヌ文化に親しみ、活動している。それは対象者のさらに子どもたちの世代でも同様である。対象者のなかには子どもが大学へ進学した上でアイヌについて研究をしているという者もいた。他地域でみられる、あるいはかつて旭川でもみられた低収入で不安定なアイヌ労働市場が崩れたことにより、アイヌ文化の伝承が職業と完全に切り離されたことで、かえって安定した社会的地位が実現しているといえる。

本調査の対象者は、その子ども世代も含めてアイヌであることにコンプレックスなどをもたない者が多い<sup>2)</sup>。

「今の子って、子どもらの友だち見てても、昔ほどさ、バカにもされてないみたいだし」（質問者「むしろ『カッコイイ』とか『羨ましい』とかっていう話もあったり」）「そうそうそう」（壮年層）

などというように、アイヌであることが肯定的に評価される土壤もできはじめている。青年層や壮年層の社会的地位の相対的な高さが、アイヌであることを捨てるのではなくアイヌであることを職業生活などと別の世界で評価したうえでのものであるならば、それはアイヌをめぐるひとつのモデルケースとなるのではないだろうか。

#### 注

- 1) この時期の観光関連としてのアイヌ労働市場は、アイヌ工芸やアイヌ舞踊などが本来のアイヌ文化の文脈から切り離されて消費されていくという「観光アイヌ」という文脈でも批判がある。ただし、この視点は対象者の階層形成という論点からははなれるため、ここでは扱わない。
- 2) もちろん、そのような者だけであるという訳ではない。たとえば壮年層のある者は、職場で尊敬していた先輩が離婚した者について、「あの人アイヌだから離婚したの」と言っているのを聞いたり、また友だちが飲み会で「うちのだんな毛深いんだよね」「いや、アイヌって言われてさ」と言っているのを聞いたりしたことのショックで、未だによほど限られた人にしか「カミングアウトできない」という。

#### 参考文献

- 野崎剛毅, 2010, 「教育不平等の実態と教育意識」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告書その1 現代アイヌの生活と意識』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 59-71.
- , 2014, 「「アイヌの貧困」の諸リスク」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告書その3 現代アイヌの生活と意識の多様性』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 27-44.
- , 2018a, 「アイヌ民族の教育問題と階層形成過程」小内透編著『現代アイヌの生活と地域住民——札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象にして』(先住民族の社会学 第2巻) 東信堂, 82-113.
- , 2018b, 「階層形成と教育・労働問題」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告書その5 帯広市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 25-37.
- 小内透, 2016, 「調査報告のまとめ」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書35先住民族多住地域の社会学的研究』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 259-63.
- 品川ひろみ, 2018, 「アイヌの家族形成と展開」小内透編著『現代アイヌの生活と地域住民——札幌市・むかわ町・新ひだか町・伊達市・白糠町を対象にして』(先住民族の社会学 第2巻) 東信堂, 51-81.

(野崎 剛毅)